

特集 異文化理解の授業づくり

ニュースレターの発行 —授業+αの異文化理解教育—

田嶋美砂子

(元星美学園中学校・高等学校)

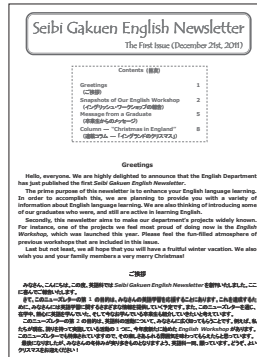
1. はじめに

経済のグローバル化とテクノロジーの発達により、人やモノが容易に移動する時代を私たちは生きています。日本で生まれたものの、生活の拠点は他国にあるという人々の存在は、もはや珍しくありません。海外からの居住者の増加により、日本社会そのものが以前よりもはるかに多文化・多言語状態になってきていると表現することもできるでしょう。

その一方、成育環境によっては、文化間・言語間の移動をほとんど経験しない人々があります。元勤務校での体感からすると、日本の一般的な中学生の多くがそうであると言えるかもしれません。私はここに、学校現場、とりわけ外国語(英語)という教科における異文化理解教育の存在意義を見出します。授業内外での活動を通じて、それまで接することのなかった、自身のものとは異なる生活様式や習慣、考え方などについて学ぶ機会、他者をよりよく理解しようとしたり、意見が相容れないときに、互いに歩み寄ろうとしたりする姿勢を培う一助となるのではないのでしょうか。本稿では、私が元勤務校で試みた異文化理解教育の実践について、ニュースレターの発行という観点から記したいと思います。

2. ニュースレター概略

英語科でニュースレターを発行する取り組みは、2つの目的を持って、2011年に始まりました。1つ目の目的は、英語学習に関する情報の掲載や教科で実施している行事の告知・報告を通じて、校内の英語教育活動を活性化させること、2つ目は、紙面上ではありますが、正規の授業以外の場で、異文化に触れる機会をできるだけ多く提供することです。



1回の分量は、A4サイズで8ページ。それを冊子にし、年に2〜3度のペースで、中・高すべての生徒と教員に配付します。この冊子は、モノクロで印刷せざるを得ませんが、カラー版をPDFファイルにし、学校のウェブサイト上でも閲覧できるようにしました。なお、このニュースレターでは、前述した2つ目の目的を果たすために、Column(連載コラム)とMessage from a Graduate(卒業生からのメッセージ)という2つのコーナーを設けています。

3. Column

このコーナーの担当者は、英国出身の教員です。使用言語は英語で、毎回300〜400語程のエッセイを執筆してもらうようにしました。主なトピックは、彼の故郷イングランドでの季節の行事についてです。例えば、12月発行の創刊号では、“Christmas in England”というタイトルの下、クリスマスイブから当日に至るまでの様子を紹介しています。文中にある“... before bedtime some children help their parents set out mince pies and a drop of brandy for Santa when he comes to deliver presents.”という記述から、「深夜にやって来る(と信じられている)サンタクロースのために、ミンスパイとブランデーを用意する」というイングランドの習慣を初めて知った生徒もいたのではないのでしょうか。

翌年の2学期に発行した第3号では、タイトルを“The Summer Holiday in England”とし、学校の夏休みと家庭での過ごし方について紹介してもらいました。それを読むと、イングランドの学校では、夏休みが2か月もあること、クラブ活動はなく、休み中にまったく登校しないこと、夏でも日差しが少ないため、太陽の光を求めて、スペインに旅行する家族が多いことなどがわかります。生徒にとっては、日本で経験したばかりの自身の夏休みとの違いを学ぶよい機会になったように思います。

前述したエッセイの引用文からもわかるように、Columnでは、未習の単語や文法項目がしばしば使用されます。単語に関しては、注釈を付けるなどの手立てを施したときもありますが、文法項目を逐一解説するようなことはしていません。それは、このコーナーが異文化理解の促進とともに、オーセンティックな英文の読解に親しむ場でもあってほしいと考えたからです。

4. Message from a Graduate

イングランド事情に特化したColumnに加えて、Message from a Graduateでは、より広い意味での異文化理解を目標としています。このコーナーの頼もしい協力者は、外国語や海外に縁の深い卒業生です。彼女たちには、インタビューを通じて、自身の語学学習や他国での生活を振り返ってもらっています。それを読んだ在校生が英語や英語圏という枠を超え、ありとあらゆる言語や文化への理解を深めてくれたらと思います。スタートさせました。私自身は在職中、4人の卒業生にインタビューを試みましたが、その内容は、みなそれぞれに大変個性的です。

例えば、第3号に登場したMさんは、青年海外協力隊の一員として過ごしたコスタリカでの2年間について語っています。ご存知のように、コスタリカの公用語は、スペイン語です。インタビューでは、①スペイン語のABCは、「アー」「ペー」「セー」と読むこと、②単語の発音は、基本的にはローマ字読みでよいこと、③挨拶では、「そのまま」「自然に生きる」などの意味を持つ pura vida (英語の pure life に相当) が用いられるといったようなことが話題になりました。

このニューズレターを発行した直後、中1では、School Life in the USA (NEW CROWN BOOK 1, LESSON 8) の学習が始まりました。USE-Readのトピックの1つは、アメリカ合衆国のスペイン語の授業です。ここでは、Mさんから教わった①～③を、生徒もすでに知っていると期待できる背景的情報として活用することができました。また、同じく中1の地理を担当していた同僚が中南米について導入する際、このインタビューに触れてくれたそうです。ニューズレター創刊時には想定していなかった出来事ですが、ささやかながらも、教科横断的な利用につなげることができました。

さらに、Mさんがインタビュー後半で述べた内容が印象的です。コスタリカでの仕事を通じて学んだことを尋ねた際、彼女は次のように答えました。

世の中には本当にいろいろな人がいるということです。仕事をするにしても、コスタリカにはコスタリカのやり方がある、それをこちら側が受け入れないと、進んでいきません。「これが正しい」と思い込んでいると、厳しいですね。少し話が大きくなりますが、お互いの違いを認められれば、それが最終的に世界平和へとつながっていくのではないかと。

Mさんのことばには、異文化理解教育の向かうべき方向性のヒントが凝縮されていると言えます。

5. 終わりに

「他とかかわる力」を教育目標の1つとするNEW CROWNでは、世界のさまざまな文化がとり上げられています。それらを上手に活用すれば、授業内で異文化理解の促進を図ることができます。しかし、ときには、本文を扱うだけで精一杯という課もあるでしょう。一方、ニューズレターは、授業の進度を妨げません。読む側も好きなときに、好きな場所で、好きなコーナーだけ眺めるといったことが可能です。

授業+αとしてのニューズレター。定期的な発行は、確かに大変な作業ですが、教科書を超えた事柄や英語以外の言語に触れる場を提供することができるという点で、ぜひお勧めしたい試みです。